



広州出土の漢代陶船

北野, 耕平

(Citation)

海事資料館年報, 11:20-25

(Issue Date)

1983

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005917>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005917>



広州出土の漢代陶船

北野耕平

1. はじめに

中国南部の広州から出土した漢代陶船として、船体の上部に複雑な船楼を設けた模型の土製品があることは、これまで発表されてきた写真によってよく知られている。しかしその陶船がどのような漢墓から出土し、伴出した副葬品にどのような内容のものが含まれているかは、全く不明であった。1981年に正式の報告書が刊行され、この陶船出土墳など1953～1960年に発掘した409基の前漢～後漢を網羅する時代の墳墓の調査成果を収録している(1)。ただこの報告について見ると、陶船に関する記述が簡潔で細部の説明を省略しているため、理解に困難なところをなしとしない。ところが1983年5月の訪中に際して、北京の天安門に面した歴史博物館に本資料が展示してあるのを見出し、詳細な観察を行うことができた。また同じく1983年末になって同じ広東省徳慶県の後漢塼室墓から、関連のある構造の陶船が出土していることを知りえたので、併せて検討するために紹介することにする。

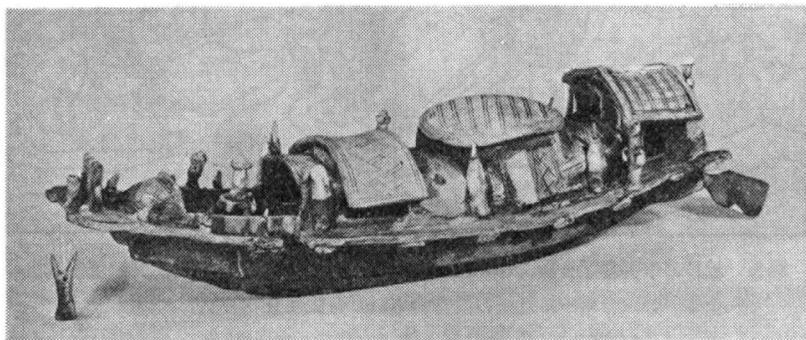
2. 5080号墓

広州の陶船を出土した漢墓は、広州市の東端にあたる先烈路19軍墳場西南の稲田中にある。地理的にいうと広州市の西側で南流してきた珠

江が直角に曲り、市の中央を東流したのち、さらに南流して海に注ぐ。この珠江が二沙頭と呼ぶ中州を形成する河岸から北へ3キロ離れたところである。この漢墓は整理番号により5080号墓と称し、地表に直径約20m、高さ約5mの墳丘を有していた。

墓は東西に並ぶ2つの主室からなる塼室墓で、両室の接する壁面は開口して相通じている。両室は同形同大で凸字形の平面をしていて、天井は円錐形である。玄室の幅と奥行は3m6cm、高さ3m62cmあり、その前の羨道は長さ幅ともに1.7m、高さ約2mでやはり山形トンネル状の天井を有している。興味があるのは両室ともに奥壁の床面に接した下方に、幅、高さともに約70cmの浅い奥行きをもつ龕を設けていることである。塼の側面には幾何図文を有するものが数十個ある。塼築の上部構造は両室とも共通しているが、床面に敷きつめた塼は東室が基盤状、西室が網代状で大きな相違をなしている。両室とも羨道は南南西に向かって開口している。

室内からは夥しい副葬品を出土したにも拘らず、報告書によると調査前すでに盗掘されていた上に、発掘時にはそれぞれの場所の器物の配列を記録する前に取り出してしまったので、両室の中でもどの器物が置かれていた位置はよく



第1図 広州漢墓第5080号墓出土の陶船（『中国の陶磁』による）

分らないという。ただそれぞれの玄室の壁に接するところには、燭台を安置するための埴敷が設けられていた。東室には一段と高くなった埴敷の施設があり、一棺を載置するだけの広さしかないところから、各室には各一棺を安置したと考えられる。しかも両室の間の壁には通路があるので、副葬品の種類と併せて夫婦が玄室を異にして隣り合わせて埋葬されたと調査者は解している。

副葬品中の金属製品としては銅鏡1、銅剣1、銅刀1をはじめ銅製品が多くて10品目に達しているのに、鉄製品は刀と削と称する短刀の2品目にすぎない。珍しいものとしては金製と限製の指輪があり、円形の簋硯も出土している。また後漢代の五銖銭が36枚含まれているのは、銅鏡が半円方形帯神獸鏡に属するのと併せて、この漢墓の年代を推定する上で重要な資料となる。

この5080号墓の特色は、最初に挙げた陶船も含めて多くの種類の陶器を出土したところにある。一般の実用的な容器や食器、炊爨用器を除くと、他はことごとく器物を象った明器である。この中には船のほか城堡、家屋、倉庫、井戸、かまど、車、馬車などの器財形陶器、人物の坐像、侍者像、舞楽像といった人物像、家畜などの動物像がある。器物の中には机、椅子、寝台、車があり、変わったものとしては陶製の刀・矛・削・戟などの武器類があることで、このように多様な明器を陶器で作った例は数多い広州漢墓の中でも本墳だけしかないという。

上述したように内部構造が埴室墓に属し、五銖銭や半円方形帯神獸鏡を副葬していること、副葬陶器の胎土が堅硬、緻密で、釉を薄く均一にかけていて青白色を呈し、ほとんど瓷器に近い感を与えるという指摘からすると、後漢代後半期に属する漢墓と解する見解は妥当である。従って同墳から出土した陶船の年代も、これに基づいて西暦2世紀代から3世紀初頭にかけての時期に限定できる。

3. 陶 船

この陶船を歴史博物館で実見した当時、遺物は漢代文物展示室の窓際側に置かれたガラスケ

ース中に単独で収蔵されていて、右舷側の細部だけでなく、船首尾についても詳細に観察することができた。(第1図)

報告書によると全長54cm、高さ16cm、船幅8.5cm、中央幅15.5cm、船幅11.5cmある。上方から見ると、細長い船体の上部に船楼の構造物を取りつけ、両舷に甲板を張り出した形状で、付属具として船に錨があり、船に舵がある。ただし歴史博物館の展示では、錨は船から2条の糸で垂下されていたものの、舵はとりつけられていなかった。報告書では長柄の着いた大きな角板形の舵身が船尾から下方に突き出している。この舵は昇降用の孔と尾柱が軸動する柄をもつ点で、中国では最も早い例というが、舵の展示が省略されていたから確認の仕様がな

陶船は全体に黄白色を呈する比較的低温度の焼成で、胎土の表面は粗野な調整で仕上げられ、精緻な模型という印象を与えない。船楼の壁面の一部に褐色斑をのこす部分があって、もと釉薬をかけていた痕跡ではないかと見られるが明確ではない。報告書では灰白色の胎土に青緑色釉を施しているが、すでに全部脱落しているとある。

粘土による表現のため船体細部の構造は知りえないものの、下半部は底の平らな船底から削舟状の底材が続き、上半部には棚にあたる側板を立てている。棚板は舳、船の両端で幾分狭まり、舳では間に直角に浪受板を当てて方形船首をなしている。船は棚の間が開放されたままで、内部の船底材の上に2本の梁材を船体の長軸に併行してとりつけ、梁材は方形船尾の端から僅かに突き出している。棚上には8本の梁材を横架して、船楼などの上部構造を支えている。この横梁は船首からやや離れた後方に始まり、船体上をほぼ等間隔で配置して、8番目の梁材は船の方形船尾を形作っている。梁材は扁平で横幅の広い角材を架していたらしい(第2図)。

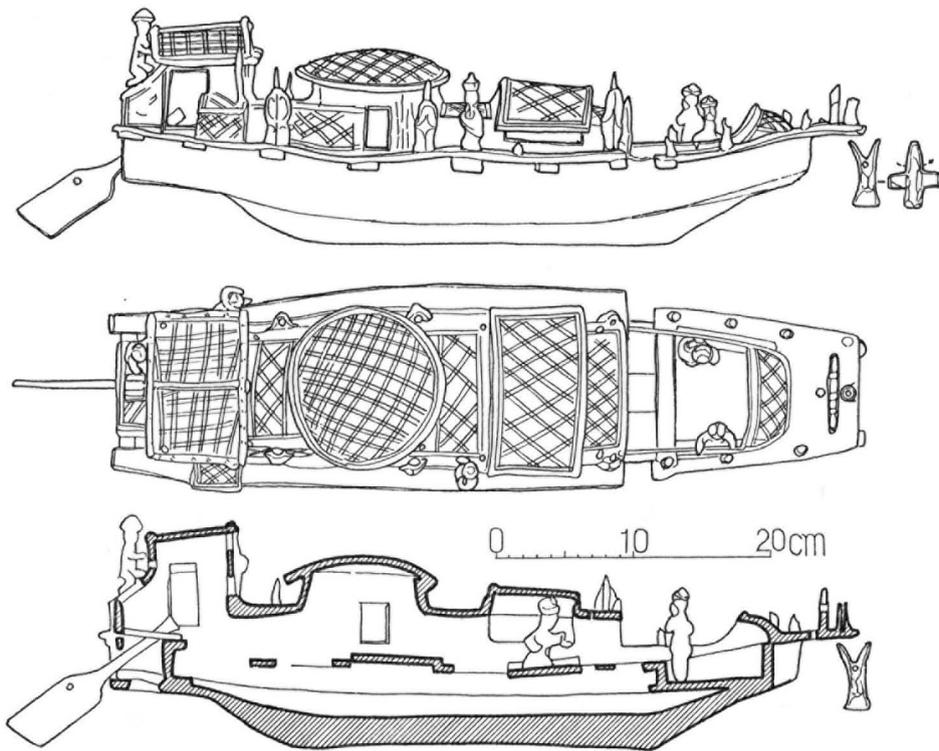
船体の梁の上部は船首の一区画と、前・中・後三室が連接した船室、および左右両舷の甲板からなる。まず船首から始めよう。船首は船体から前方に張り出した甲板と船内の頭半の部分である。船内の空間は船首から船尾まで縦通し

ていて、報告書の断面図を見ても隔壁の設備はなく、8本の横梁のみ左右に貫通している。船室の頭端は網代の編物の覆いで波除を作り、縁を上方に折り返してある。この頭端部には屋根がなく上方は明け放しであるが、またこの部分だけ床を張っていたようである（第3図2）。

甲板前部には厚手の板を衝立形に垂直に立てている（同図1）。これを一種の戸立てとしてよければ、船首正面の波浪の衝撃を受ける機能を持つものであったろう。この板材は正面から見ると王冠状の透しと周縁に刳込がある。まず上縁には等間隔で3個の半円形の刳込があり、板の中央に3個の円孔と花卉形の透しとを穿ち、側縁には深い切込みを斜めに入れている。波の衝撃を破碎、吸収する実用とともに装飾をかねた装置であろう。この衝立の前には太い円筒形の柱を直立してとりつけている。船首の最先端に位置することからすると、錨網を巻きとる用途に供したものかもしれない。船首の両舷には竿を据えておく受台柱が3本ずつ並ぶ。な

お両舷の甲板はこの竿受柱をもつ船首部の甲板と、船室側の両舷との間が不連続で、隙間を作っている。土製の小型模型のため整齊な表現とはいいがたいが、これらの部分はかなり忠実に原形を写しているとみられ、なお今後細部について観察、検討する価値があろう。

さて前・中・後に分かれた船室は、前方から低、中、高と高さを増している。前室は緩やかなアーチ形の苫で幅広く覆われ、前後二段の高低がある。苫が縁取りをした網代の編物からなることは、ヘラ描きによる複線の斜行線を交叉させていることから明らかである。壁面には横に細長い窓があり、板張りの床面を持っている。中室は両舷側に出入口をもちやや高くなった部屋で、中央に大きな円板形の屋根が中高に葺かれている（同図4）。この屋根も網代で、出入口のある側壁も網代に編んだ構造である。なお船室の四隅には先の尖った棒が1本ずつ立てかけられ、幕状の軟らかい物体がまといつけてあったらしいが、用途はよく分からない。

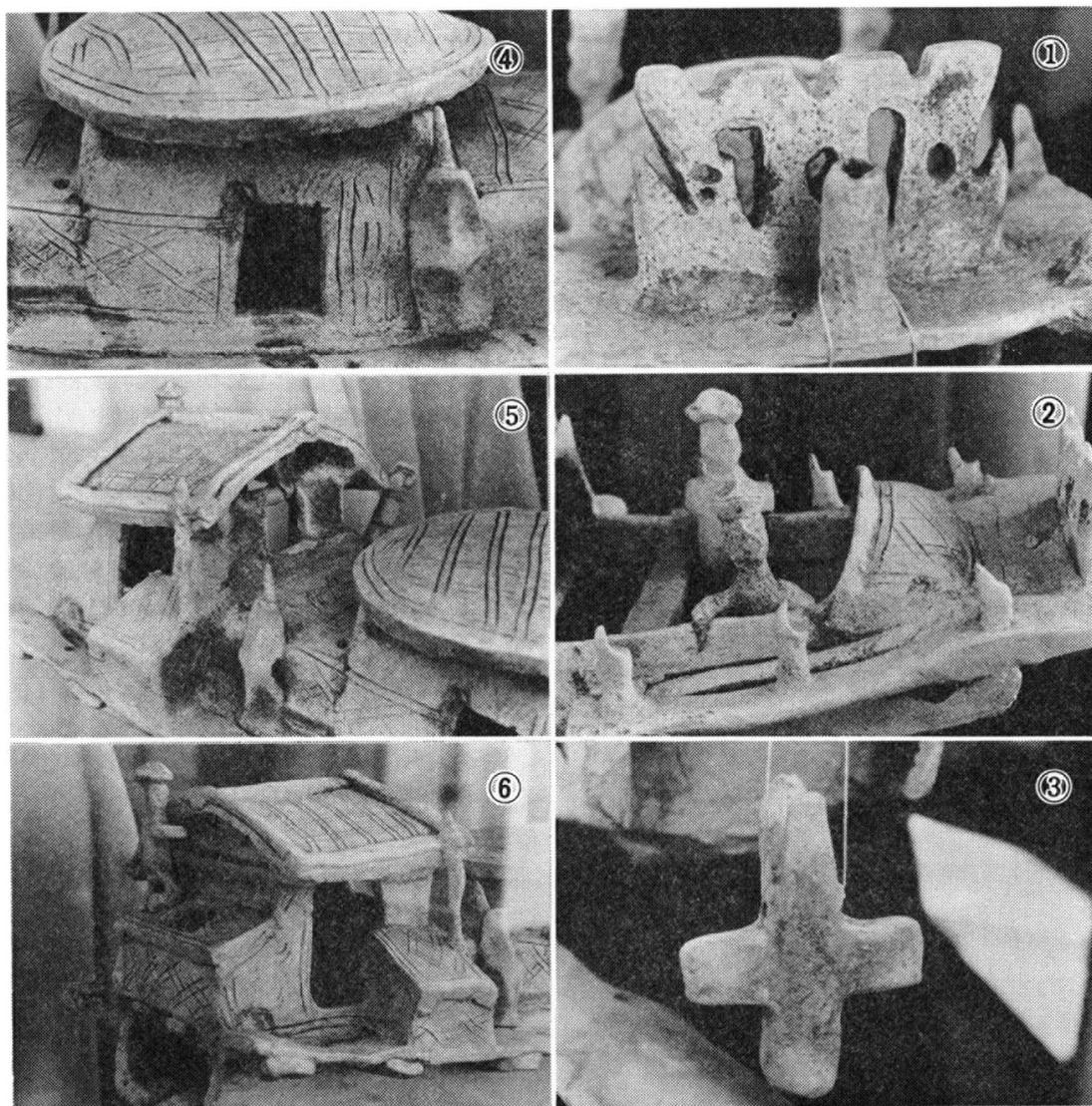


第2図 広州漢墓第5080号墓出土の陶船
 （『広州漢墓』による、一部写真により補正）

後室が船楼状に最も高く作られているのは操舵室でもあるためで、両舷側に入出口をもつほか、船首側正面中央に前方を視察する窓があり、船尾側には横に長い通し窓がある。この後室は丸太材を柱とし、屋根形の棟をもつ屋蓋はいずれも網代編である。後室の外側には右舷前側と船尾とに網代編の張出した小部屋が付設している（同図5・6）。報告書によると船尾の部屋を尾楼と称し、右舷側の小さな造りつけの小屋を便所としている。その解釈の理由として珠江上には比較的大きな「花尾渡」という曳き

船があり、便所は船尾右舷にこれと同じものが設置されていることを指摘している。

船上には7体の人形が付けられていたといひ、高さは約6cmあるという。人形の表現は稚拙で、いずれも頭部が大きく帽子状のものをかぶり、胴体に四肢をつけたのみで衣服を描写していない。船首側の船内に2体、右舷と左舷に各1体、尾楼上に1体、中室に倚座している1体と、脱落した1体がある。脱落した1体は両手に物を持ち腹這いになった姿というから、中室前寄りの船内にあったものかもしれない。い



第3図 廣州漢墓第5080号墓出土の陶船細部
（北京中央博物館展示資料による）

ま横梁上に離脱した痕跡がある。これらの人形からすると本来の船の乗組員数は7名で構成されていたとみるべきであろう。なお付言しておく、船にかぎらず家屋などの器財形明器に人物像を加えるのは、広州漢墓群の場合、前漢代から後漢前期にはなくて、後漢後期に至って初めて表れる現象である。たとえば5032、5041号墓の家屋形明器がこの例で、5080号墓の人物と同様に頭部が大きく、鉢巻状の一種の帽子をかぶった表現として共通している。その中で特に5080号墓には多数の変化に富んだ明器を副葬したことに特色があるといえる。

陶船の原形の船の規模を人物像の高さからかりに割り出してみると、全長14m、幅、高さともに4m弱となる。錨は変わった形状で、本体は十字形をなしていて、下端は錘状に太くなって平坦な底部をもち、上方は鳥のくちばし形に開いて尖り、その基部に1孔を横に穿っている。左右に伸びた棒は幅を減じることなく、厚さのみ薄くなっている。類品はなく、原物を形作っているものが石製か一部木製なのかもよく分からない(同図3)。

4. 関連資料

広州5080号墓出土の陶船は、後代の中国船に認められる要素をすでに具備している点で、後漢後期の船舶としてだけでなく、中国船舶史の上で高い価値を有している。

1983年、第9期の『文物』中に、これと比較できる資料が掲載されているので関連資料として紹介しておこう(2)。

これは1980年9月、広東省徳慶県高良公社官村大隊で発掘した後漢の埴室墓から出土した陶船模型である。陶船の胎土は泥質灰陶で、表面は橙紅色を呈し、施釉はなく、出土時は比較的完形であった。全長54cm、高さ20cmで、船首尾が反り上がり船底は平らである(第4図)。上部は前・中・後の三部分に分けられ、前は頭艙、中は楼艙、窓は舵楼となっている。頭艙は長さ7cm、幅12cm、高さ6cm、アーチ形の苫製の屋根をもつ。楼艙は中央の主要な

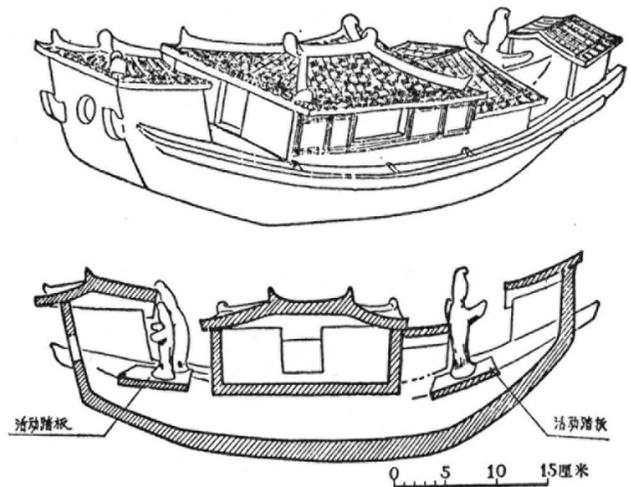
構造物で、長さ16cm、幅13cm、高さ10cmで、軒出しのある屋根を持ち、両舷に窓を明け、船尾の舵楼に通じる門がある。両側の壁には二重の棧で仕切って5個の区画を作り、柱や梁の構造を示しているようである。また楼壁と両舷の接する部分にそれぞれ3個の孔を穿っていて、おそらく底艙の採光と排気孔を表現しているらしい。舵楼は長さ7.5cm、幅11cm、高さ8cmで、船尾の壁に直径2.2cmの円孔を穿っている。

頭艙と舵楼の下にそれぞれ1枚の底板があり、頭艙には高さ10cmの人形1体、舵楼には高さ6.3cmと7cmの2体があり、すべて腰をまげて背をかがめ両手を前に向けている。

以上が徳慶漢墓出土陶船の解説であるが、古墳は中字形をした埴室墓で、唐代の墓のため一部破壊されている。墓室の天井は蒲葺形と円錐形が結合した形式である。副葬品は陶製の明器を主とし、その構造と器物の特徴から推測すると、この墓は後漢中期に属し、建初元年墓(文物1959—11)に近く、やや時期の下るものとする(と広州東郊の埴室墓(文物参考資料1955—6 筆者注; この埴室墓は上記の5080号墓を指している)と同時期である(3))。

5. 漢代における中国南部の船

広州は珠江の河口に位置して、秦漢代以来中国沿岸の海港の中でも、最も水運が発達した



第4図 広東徳慶後漢墓出土の陶船
(『文物』1980年第9期による)

地域である。同地域の漢墓からはすでに12例をこえる陶船・木船の模型が出土していて、その大小各種の船型からすでに多様な船舶が発展していたことをうかがわせるという(第5図)。これらについて、公表された資料をもとに改めて集大成して検討を加えることにしたい。

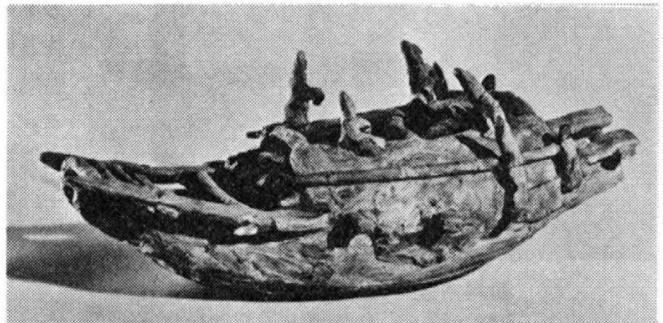
報告書中に指摘している点として、操船のための舵の出現と上部構造としての船楼の建造は、中国の場合、漢代にまで遡る。船舶発達史の上で、これらの諸要素が最も早く成立した地域とその時期の問題は極めて重要である。帆に関してはこれらの資料の中にまだ存在していたことを実証する例はない。文献の上では、『釈名』積船第25の中に「帆、泛也。隨風張慢日帆、使舟疾、迅迅然也」とあるというが、実態はいかがであらうか。いずれにしても、この広州市の5080号墓出土の陶船は後漢後期における最も注目すべき船型に属するものといわねばならない。

〔注〕

- (1) 広州市文物管理委員会・広州市博物館『広州漢墓』(『中国田野考古報告集』考古学刊丁種第21号) 1981年
- (2) 楊耀林 譚永業「廣東德慶漢墓出土1件陶船模型」(『文物』1983年第10期)
- (3) 黃文寬, 麥英豪「廣州市東郊東

漢埴室墓清理紀略」(『文物參考資料』1955-6)

本文中でも述べたように(3)の概報は陶船を出土した5080号墓の発掘概報である。これによると、古墳が発掘調査されたのは1954年12月に、偶然採土工事中埴室墓が発見され、大部分の完全な副葬品が取り出された後であったという。概報は5080号墓に限っているため、報告書の記述よりも詳細かつ具体的で、陶船に関する説明は概報に尽きている。ただし、5080号墓の東室、西室いずれから陶船が出土したかという点については、副葬陶器の大部分が西室の埴敷き上に置かれていたこと以上にはわからない。なお、報告書と概報の方位が南北逆位になっていて、方向の点でも差異があるのは理解しがたいことで、概報に従って埴室墓は南向きで、長軸は北に向かって東に14度偏しているとみるべきかと考える。



第5図 広州漢墓出土の陶船